OFFICIAL SELECTION
COMPETITION
FESTIVAL DE CANNES
第64回カンヌ国際映画祭
正式出品作品
神さま、
なぜ、
私なんですか？
ローマ法王の休日
ナンニ・モレッティ監督作品
『息子の部屋』
就任演説の直前、新・法王様が逃げだした！
笑って、ホロリ。人生に束の間の休息を。
監督・脚本：ナンニ・モレッティ『息子の部屋』　出演：ミシェル・ピッコリ　ナンニ・モレッティ　レナート・スカルパ　イエルジー・スチュエル
配給：ギャガ GAGA★　©Sacher Film . Fandango . Le Pacte . France 3 Cinema 2011
A FILM BY
NANNI MORETTI
WHIT MICHEL PICCOLI NANNI MORETTI RENATO SCARPA JERZY STUHR WITH THE PARTECIPATION OF MARGHERITA BUY STORY AND SCREENPLAY NANNI MORETTI FRANCESCO PICCOLO FEDERICA PONTREMOLI
1ST ASSISTANT DIRECTOR BARBARA DANIELE SOUND ENGENEER ALESSANDRO ZANON COSTUME DESIGNER LINA NERLI TAVIANI PRODUCTION DESIGNER PAOLA BIZZARRI
EDITOR ESMERALDA CALABRIA MUSIC FRANCO PIERSANTI DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY ALESSANDRO PESCI LINE PRODUCER LUCIANO LUCCHI
PRODUCED WITH THE SUPPORT OF EURIMAGES A CO-PRODUCTION SACHER FILM • FANDANGO (ROME) • LE PACTE • FRANCE 3 CINEMA (PARIS) IN COLLABORATION WHIT RAI CINEMA
IN ASSOCIATION WHIT SOFICA COFICUP A BACKUP FILMS FOUND CANAL + FRANCE TELEVISIONS
PRODUCED BY NANNI MORETTI AND DOMENICO PROCACCI DIRECTED BY NANNI MORETTI
SACHER FANDANGO Le Pacte
France 3 cinéma
Rai Cinema
GAGA★
romahouou.gaga.ne.jp

ローマ法王の休日

人間、法王の選択に、
そのあたたかな笑いに、世界が感嘆！

OFFICIAL SELECTION
COMPETITION
FESTIVAL DE CANNES
第64回カンヌ国際映画祭
正式出品作品

★最高に知的で最高に自由な映画！素晴らしい！
ラ・レプブリカ紙　★★★★★

★モレッティ監督史上、最高傑作！
これは風刺ではない。権力の場に生まれた崇高な
コメディであり、力強い感動作だ。
イル・メッサジェーロ紙　★★★★★

★夢を見たい。そんな、すべての大人に贈る最高に成熟した寓話！
ヴァニティ・フェア誌　★★★★★

★感動的にして深遠、滑稽にして優しい。今こそ見てほしい１本。
ミネアポリス・スタートリビューン紙　★★★★★

★ここ数年の、イタリア映画最高傑作！
ニュー・リパブリック誌　★★★★★

2012年
ダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞
（イタリア・アカデミー賞）
最優秀俳優賞受賞
ミシェル・ピッコリ

2011年
イタリア・ゴールデングローヴ賞
最優秀作品賞受賞

2011年
イタリア映画ジャーナリスト協会賞
最優秀監督賞、最優秀撮影賞、
最優秀衣装デザイン賞、最優秀脚本賞、
最優秀製作者賞、最優秀美術賞、
ヨーロピアン・シルバーリボン賞 受賞

INTRODUCTION

法王様が、ローマの街に逃げ出した ――？！
人生のつかの間の休息に、笑ってホロリ。
ナンニ・モレッティ監督が贈る、
法王版「ローマの休日」。

ローマ法王死去 ――。この一大事を受けヴァチカンで開催される法王選挙（コンクラーヴェ）。サン・ピエトロ広場には、新法王誕生を祝福しようと民衆が集まり、世紀の瞬間を心待ちにしている。そんな中、投票会場のシスティーナ礼拝堂に集められた各国の枢機卿たちは、全員が心の中で必死に祈っていた。「神様、一生のお願いです。どうか私が選ばれませんように。」そんな祈りもむなしく新法王に選ばれてしまったのは、誰も予想だにしなかったダークホースのメルヴィル。早速バルコニーにて大観衆を前に演説をしなければならないが、内気な彼はあまりのプレッシャーからローマの街に逃げ出してしまう・・・・・・。

まさかの事態。あわてたヴァチカン報道官は、なんとかコトが外界にバレないよう画策し、街中に捜索の網を張る。一方メルヴィルは、街の人々との触れ合いを通し、人生において大切なもの、人間の信仰心や真心、そして“法王”の存在意義を見つめ直していくが、演台に戻らねばならない時間は迫っていた。果たして、ローマの街で彼が見つけた大切な答えとは――？

自ら脚本・演出から出演までをもこなし、その創作スタイルと、現代が抱える問題を人間的な視点でユーモラスかつシニカルに描く作家性によって、イタリアのウディ・アレンとも呼ばれるナンニ・モレッティ監督の新境地。本作は2011年カンヌ国際映画祭コンペティション部門に正式出品され、イタリア、フランスでもスマッシュヒットを飛ばしている。『息子の部屋』(01)でカンヌ国際映画祭パルムドールを、『親愛なる日記』(93)で同映画祭監督賞を受賞、本年度カンヌ国際映画祭では審査委員長を務めるナンニ・モレッティ監督が見たヴァチカンとは、どんなものなのか。主演に『昼顔』『美しき諍い女』をはじめ100本以上の作品に出演しているフランス映画界の重鎮ミシェル・ピッコリを迎えて描くコミカルにして深遠なドラマ、美しい映像、そしてイタリアの華麗にして繊細な文化。法王を悩める一人の人間として描き、カンヌ映画祭を沸かせた最大の話題作が遂に登場。

あなたも人生の束の間の休息に、一息ついて、大切なものを見つめ直してみませんか？

STORY

プレッシャーに耐えきれず、ヴァチカンから逃げ出してしまった新・ローマ法王。ローマの街で人々と触れ合いながら、彼は本当に大切なものを見つめ直していくが――。

第一章：ローマ法王、逝去

イタリアのローマ市内にある世界最小の主権国家ヴァチカンでは、厳粛なムードの中、大々的な葬儀が執り行われていた。ローマ法王が逝去したのだ。システィーナ礼拝堂には各国の枢機卿たちが集まり、次期法王を決める法王選挙（コンクラーヴェ）を開催。サン・ピエトロ広場では各国のマスコミの他、世界中のカトリック教徒たちが新法王誕生の歴史的瞬間を心待ちにしている。そんな中、投票の行方を見守る枢機卿たちは、全員が必死で神に祈りを捧げていた。

「神様、一生のお願いです。どうか私が選ばれませんように――」

本命視される枢機卿たちも多く、票がまとまらない。何度も投票が繰り返される中、名だたる枢機卿たちを差し置いて新法王に任命されたのは、今までまったく名の挙がっていなかったダークホースのメルヴィル（ミシェル・ビッコリ）だった。心の準備も整わないまま、法衣に着替えるメルヴィル。民衆に新法王としてスピーチをするのがしきたりなのだ。しかし民衆たちの大歓声を聞いたメルヴィルは、サン・ピエトロ大聖堂の広場を見下ろすバルコニーに出る寸前で、突然叫びをあげその場から逃げだしてしまう。「私には無理だ・・・・！」

第二章：ローマの街への逃亡

部屋に閉じこもるメルヴィルは医者の診断を受けるが、体には何の異常もない。ヴァチカンの報道官（イエルジー・スチュエル）は、セラピスト（ナンニ・モレッティ）を呼び寄せセラピーを実施するが、それでも状況は打開できない。マスコミが一斉に「法王はどうした？」と騒ぎ立てる一方で、新法王が公表されるまでサン・ピエトロ大聖堂から出られないその他の枢機卿たちは、外にコーヒーを飲みに行きたいだの、カラヴァッジョ展に行きたいだのと、呑気に騒ぎ始める始末。

頭を悩ませた報道官は、ある決意をする。禁を破り、メルヴィルをローマ市内の外部のセラピストの元へ連れて行こうというのだ。厳重な警備を固め、極秘裏に法王をヴァチカン外部に連れ出す報道官たち。しかし何と、彼らの目を盗み、メルヴィルはローマの街へと逃げ出してしまった・・・・・・。

第三章：人々との触れ合いと、法王の新たな決意――

こうしてローマの街へ「長い散歩」に出たメルヴィル。セラピストのアドバイスに翻弄されたり、デパートガールやパン職人と触れ合ったり、ストリートミュージシャンの音楽に聞き入ったり、舞台俳優たちとの出会いを通して若き日の"俳優"への夢を思い出したりと自由を謳歌。教会の神父の話を聞き、人々の信仰心に触れ、徐々に人々の本音や信仰心の意味、そして法王である自分の存在意義を感じとっていく。一方、街の至る所で見かける新聞やニュースでは、いよいよ「新法王、いまだ発表されず」という報道が過熱。メルヴィルがヴァチカンに戻らねばならない時間は、刻一刻と迫っていた。果たして、ローマの街で彼が見つけた大切な答えとは――？

PRODUCTION NOTES

法王を人として描く。聖域に踏み込むという挑戦

全世界11億人以上にのぼるカトリック教徒の最高指導者たる「法王」を主人公に据え、しかも就任演説を前に逃走するという大胆な構想に至った過程について、監督のナンニ・モレッティは語る。「もともとは、本作の共同脚本を手掛けたフェデリカ・ポントレモーリとフランチェスコ・ピッコロと私の3人で、新作の企画として別々のアイデアを練っていたが、“新しく任命されたローマ法王が、彼の登場を期待して待つ信者たちの前になかなか姿を現すことができない”というシーンを思いついたことから企画が絞られ、話を膨らませていった。確かにかなり挑戦的な題材に見えると思うが、決して宗教批判をするつもりで作ったわけではないんだ。」

彼は続ける。「宗教批判がしたいのであれば、近年カトリック教会でおこっている様々なスキャンダルなどを扱う手もある。しかし、そもそも私はカトリックを批判する気などないし、既に人々に知られていることをわざわざ映画を通して描きたいとも思わない。描きたかったのはあくまでも、着想シーンから膨らませた、私なりの“法王”という役職についた人物の物語であり、ヴァチカンであり、コンクラーヴェでした。」

挑戦的な題材に、本国の公開時、一部のカトリック信者より批判の声も上がったというが「作品自体への批判ではなく、“カトリックの教えを反映していない”という注意だね。実際、ヴァチカンからは何の干渉もなかったよ」と、モレッティ監督は話す。

ちなみに、監督自身がカトリック教徒かという質問に対しては、「それなりにカトリックの教育を受けたが、私自身は信奉者ではない。だが、私はこの映画の中で神を信じる人を批判的な目で見てはいません。私は人間を描きたかったのであり、教会を告発しようとしたのではないのだから」と答えている。

生きる伝説、名優ミシェル・ピッコリ

主演を務めるのはミシェル・ピッコリ、86歳。60年以上にわたるキャリアを持ち、数々の名作に出演し、名だたる名優たちと共演を重ねてきた“映画界の生きる伝説”ともいわれる名優。いきいきとしたチャーミングな演技で、「法王になりたくなかった気弱な新・法王」という役柄に生命を吹きこんでいる。

モレッティ監督はピッコリについて、「この映画の成功の鍵は、彼のキャスティングにあったと言っても過言ではない」と話す。「存在感、演技力は言うまでもないが、彼の素晴らしいところは、大ベテラン名優にして、柔軟であり、すぐに私たちのやり方に合わせてくれて、撮影現場に親密で熱い関係をつくりだしてしまうことだ」と賞賛を惜しまない。

しかしピッコリは、当初監督がキャスティングに際して慎重だったことを暴露。「法王の役を演じないかと提案された時、私は即座に承諾したが、監督は何日間か試し撮りをして、その後やっと私に決めてくれたんですよ」と話す。またモレッティ監督は撮影にも一切妥協しない姿勢で臨んだようで、ピッコリに「過酷な撮影だった。長年やってきた私が、もう俳優という仕事を辞めてしまおうかと思ったくらいだ」とまで言わせている。

こうして監督が引き出した役者たちの演技が、深いことを面白く、難しいことを易しく表現することを成功させた。「ピッコリのまなざし、動き、笑顔、そのすべてが作品に予想を超えた輝きをもたらせてくれました。彼がいなければ、単なる“悲しい映画”になってしまったかもしれません」と監督は語っている。

ローマ市内に現存する、荘厳な歴史的建造物での撮影

コンクラーヴェが行われるシスティーナ礼拝堂や、サン・ピエトロ大聖堂のバルコニーなど、本作の大半の舞台となるヴァチカン内の場所は撮影不可能であったため、制作陣はそれに似つかわしい撮影場所を見つけることから着手しなければならなかった。彼らは、荘厳でありながらもバロック様式が主張しすぎない空間、富を誇示しすぎない空間を必要としていた。“自分はローマ法王には不適格ではないか？”と不安を覚える主人公メルヴィルの疑念や苦悩が、どこか反映されているような環境を探し、結局ローマ市内にある複数の歴史的建造物を使って撮影を敢行することとなった。

なお冒頭の、人で埋め尽くされたサン・ピエトロ広場での前法王の葬儀シーンには、ヨハネ・パウロ2世の実際の葬儀の映像が使われており、そのシーンからフィクションへと移りかわるシスティーナ礼拝堂へ向かう枢機卿たちの列が映し出されるシーンは、17世紀に建造されたバルベリーニ宮殿で撮影された。バルベリーニ宮殿は、「ローマの休日」でも撮影に使われていることで有名である。

室内のシーンには、ローマにある1500～1600年代の建築物が使われており、法王の住居はムッチョリ宮、ナンニ・モレッティ演じる精神科医が枢機卿たちに聖書の一節を読み聞かせるレクリエーションルームは、カンピテッリ広場にあるスピノーラ宮、法王がためらいつつさまよう廊下は、ムッチョリ宮やサッケッティ宮といった個人の邸宅だ。また、枢機卿たちがバレーボール大会を行う広場は、イタリアのフランス大使館として使用されている盛期ルネサンスの建築ファルネーゼ宮の庭である。

一方、法王がローマの街を散策するシーンにおいては、チェーホフの舞台上演は1927年創建のヴァッレ劇場、正体を知られていない法王が若い神父の説教に耳を傾けるのは1756年創建の聖ドロテア教会、そしてヴァチカン報道官と逃亡中の法王が出会う場所は、アウグストゥス帝時代の広場の遺跡が使われている。その他ローマ以外で撮影されたシーンもあり、衛兵たちが演習をしているヴァチカン庭園のシーンは、ローマとオルヴィエートの中間に位置するバニャイアという小さな町にある、16世紀に建設されたイタリア有数の庭園ヴィラ・ランテで撮影されている。

COLUMN

「ローマ法王事情」

田之倉 稔（評論家）

本作の原題である「Habemus Papam」とは、ローマ法王が決まったときサンピエトロ教会のバルコニーにならんだ枢機卿のひとりが法王の決定を宣言するラテン語である。英語で言えば、「we have a pope」となる。教会の広場に集った信者たちは歓声をもってこれに答える。こうして法王の死と誕生の儀礼がはじまる。

なお、新しい法王が決まるまでには、俗世間のうかがいしれぬ事情もあるようで、かなり時間がかかることもある。選出方法は「コンクラーベ」（「クラーベ」とは「鍵」の意）といわれ、選挙権をもった枢機卿が一室に閉じ込められ、外部との連絡を禁じられる。ケイタイはもちろん取り上げられる。多数を制したものが法王に選ばれるのだが、それまではひたすら投票が続けられる。選挙の結果決まらないと教会に隣接する館の煙突から黒い煙があがる。何日かして白い煙が出ると、新しい法王が決まった知らせとなる。すると市民は続々と広場に集り、「Habemus Papam」を聞くことになる。

法王庁は伏魔殿である。外部からはうかがい知れぬことが多々ある。在位の短かかった法王は毒殺されたのではないか。マフィアと結託しているのではないか。大量の株を取得して企業を脅しているのではないか。などなどイタリア人の噂の種はつきない。その意味ではフィクションの恰好の素材である。ナンニ・モレッティもこの映画はフィクションであると断っている。しかし重責に耐えかねた法王の治療に精神分析医がよばれたり、新法王が法王庁を逃げだしてローマの町を歩き回り、役者たちと交流したり、といった物語はリアリティに富んでいる。「コンメディア・アッリタリアーナ」（イタリア喜劇映画）の系譜につらなる傑作である。

ミシェル・ピッコリ演じるメルヴィルは名前からすると、イタリア人ではない。このところポーランド人、ドイツ人と外国人法王が続いている。競馬ではないが、本命とされているイタリア人枢機卿の争いをぬってダークホースが勝利をおさめる場合がある。法王になれば一族が潤うといわれてもおり、法王になることをいやがる枢機卿はいない。ところがメルヴィルはちがう。プレッシャーから逃げ出し行方をくらます。街に飛び出し一般信者の世界を知ってしまった以上、もう今までの法王ではいられない。戦争中のユダヤ人問題、アラブ問題、解放神学の問題など、現代世界には法王庁の政治を批判する難問が山積している。バチカンは変わらなくてはという声が上がっており、バチカンもまさに改革を進めている。世界の声を反映した新しい法王の必要性を痛感した法王は、腹をくくり、彼なりの就任スピーチをするのだ。これは、ヴァチカン批判もさることながら、「開かれた法王庁へ」というモレッティの思いなのではないだろうか。

映画が3倍面白くなるキソ知識

ローマ法王
全世界に11億人以上と言われるカトリック教徒の最高位聖職者。一般的にラテン語でPāpa、英語ではPopeと呼ばれている。日本のカトリック教会の中央団体であるカトリック中央協議会は「ローマ教皇」の表記を推奨しているが、日本政府における公式称号は「ローマ法王」である。現在、教皇位にあるのは2005年4月19日に78歳で選出されたベネディクト16世(ヨーゼフ・ラッツィンガー)。

枢機卿／ラテン語：Cardinalis（カーディナル）
法王につぐ高位聖職者。大司教の中から法王自身が任命する。全世界で200人弱、そのうちの80歳以下の120人程度がコンクラーヴェに参加できるとされている。枢機卿の礼服は赤。13世紀以来、信仰に命を捧げる覚悟を表す意味で緋色を身につける慣習があり、そのためヨーロッパでは"カーディナル"は「赤」の代名詞でもある。

コンクラーヴェ／ラテン語：Conclave
カトリック教会において、ローマ法王を選出する選挙システム。投票権を有する枢機卿たちにより、ヴァチカン市国ヴァチカン宮殿内のシスティーナ礼拝堂にて、前法王の死後15日以降に開催される。投票は、所定の用紙に無記名で行われ、2/3の得票をもって決定となるので、決定までに数日を要することもある。選挙期間中は外部との連絡が完全に断たれるため、結果は、煙突からの煙(白い煙が「新法王決定」、黒い煙が「未定」)で報告される。決定後、新法王は、サン・ピエトロ大聖堂の広場を見下ろすバルコニーに出て、「ウルビ・エト・オルビ」(Urbi et Orbi、「ローマと世界へ」の意)ではじまる在位最初の祝福や演説を与える。

システィーナ礼拝堂
ヴァチカン宮殿の中にあり、ミケランジェロが描いた「創世記」などの大天井画で有名。2005年のコンクラーヴェからは枢機卿団が昼夜缶詰にされる慣例は廃止され、隣接した宿舎で宿泊、会議の合間には中庭を散策することも可能となった。ただし通信は携帯電話をはじめ厳しく制限され、礼拝堂と宿舎周辺は妨害電波により情報統制されている。

サン・ピエトロ大聖堂／サン・ピエトロ広場
カトリックの総本山。世界最大級の教会建築。創建は4世紀。現在の聖堂は2代目にあたり、1626年に完成したものである。大聖堂には法王が立つバルコニーがあり、その法王を見ようと人々が集まる場所はサン・ピエトロ広場。広場は1656～67年の建築で、設計者ベルリーニは全体が信徒たちを抱きかかえているようにデザインしている。

ヴァチカン
イタリアの首都ローマに内在する世界一小さな主権国家。統治者は、法王。国土のすべてが世界遺産に登録されており、主な建築物はサン・ピエトロ大聖堂とヴァチカン宮殿。面積は約44ヘクタール。ほぼ東京ディズニーランドの内側におさまる。この国で生まれた国民は存在せず、世界中から集まってきたカトリックの聖職者や関係者が1,000名ほど在住。彼らはヴァチカンに赴任すると国民となり、元の国に帰ると国籍もその国に戻る。

スイス衛兵隊
カトリックのスイス市民からなる、ヨーロッパ最強と言われる傭兵部隊。16世紀初頭よりヴァチカンの警備にあたっており、主な任務はローマ法王の警護、法王住居とヴァチカン市国城門の警備、コンクラーヴェ中の枢機卿団の警護などである。年齢は19歳から30歳までで構成されており、スポーツ能力と人品が良好であることなど厳しい審査がある。現在は100人強が属し、3個隊で構成されている。

チェーホフの「かもめ」
映画の中で舞台俳優たちが語る台詞は、アントン・チェーホフの戯曲「かもめ」。女優を夢見て挫折する若い女性、過去を忘れて生きる男など、人生を思い通りにできない、さまざまな登場人物たちの苦悩が語られている。

「WE HAVE A POPE」
法王が決まったことを人々に知らせる際の決まり文句。本作の原題。

COLUMN

「祈り」不在の現代に

名越康文（精神科医）

主人公であるメルヴィルは、冒頭、望まずして「法王」という頂点にまで登りつめることとなります。
彼はガツガツした向上心や権力欲求を持つ人間ではなく、謙虚に生きてきた中で、周りに押し上げられてそこまで登ってしまったであろう気弱な枢機卿でした。
ここで描かれる「法王職」は、着任を目標とするような名誉職ではなく、コンクラーヴェも、現代の学級委員選挙さながらの「選ばれた方がハズレ」といった様相です。
とはいえ、元来が真面目なメルヴィルは、神の代理として過ちを犯せない存在になるという重責に真摯に悩み、着任演説を前にあまりのプレッシャーから街へ逃げだしてしまいます。
こうした逃避行動は「昇進を望まない社会人」が増えたという、現代的な流れにも重なりますが、臨床的にみても、彼を追い詰めたものが、
（1） そもそもの選出がネガティブな押しつけであったこと
（2） 重責への葛藤
（3） 不安を受け止めてくれる相談相手がいなかったこと
であるとみて取れます。
ここで着目すべきは、「迷える子羊の導き手」であるはずの「枢機卿仲間」が彼の相談相手になりえなかったことであり、またそれ以上に彼が、「不安を受け止めてくれる最大の理解者」であるべき＜神＞に「祈らない」という点です。
「神の裁断（＝法王への任命）はあるが、神との対話は行われない（＝人は甘んじて受け入れることしかできない）」ということでしょうか。そこには監督のカトリックへの強烈な皮肉を感じます。
これは緊急時にありながら、バレーボールに夢中で興じる枢機卿たちの描き方にも表れているようで、デフォルメされたその滑稽な様は、限定された人生を歩んできた老人の器の小ささ、変化への対応力のなさ、セクト化への揶揄であると捉えられました。
また、強引に症例を自らの公式に当てはめ、病名をつけようとするなど、こちらもかなり象徴的に描かれた２人の精神科医の存在も、個人的には大変興味深いものでした。

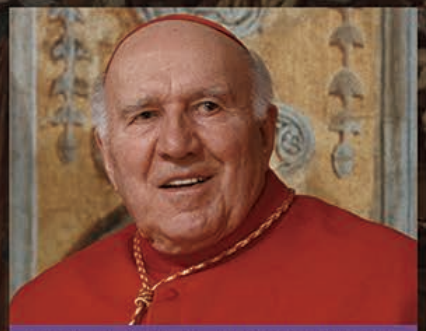
本作を観ている間、私はある種の違和感を感じていました。ふとそれが、この作品に「隣人の存在に気づく瞬間」がないからではないだろうか、ということに気付きました。
登場人物は、すぐそばで会話をかわしますが、そのやり取りは空虚で、そこに「心の対話＝繋がり」を感じさせるシーンが不在なのです。
現代は「つながり」の薄い時代です。日本もしかり、世界的に政治や会社、コミュニティなどからこぼれおちそうな人の手を握って救い上げることもなければ、上の人を支えもしないという哀しい現状。
それが俗世間だけでなく、神に近い世界でもおこっていることが、みうけられます。
そんな中で、最高位まで担ぎあげられてしまったメルヴィルは、社会の中の被害者のひとつの形であり、最後の演説での「私は教えられる立場の人間です」という言葉は、「自分は誰か（何か）と繋がりたい」という切実な心の叫びにも聞こえました。

「祈り＝自身と向き合い心を落ち着ける術」を知らない社会は脆弱です。近視眼的に目の前のつじつま合わせに終始し、本来の自分に戻れない人の心は折れやすい。
かつては日本でも、村々の各共同体にいたはずの「心の指導者」が、今は圧倒的に少なくなり、心を鍛える術を知らない大人が増えてきました。これは、実はとても深刻な問題です。
そんな現状への懸念と、「祈り」不在の宗教の空洞化への警鐘を、ユーモアを交えつつ描く監督の眼差しはシニカルで、リアルに刺さります。
本作は、決して対岸のファンタジーではありません。「法王」という稀有な存在を描きながら、痛切に共感できる、身近なテーマを描いた我々の物語です。
今だからこそ多くの人にみてほしい作品です。

STAFF & CAST

●ナンニ・モレッティ　NANNI MORETTI
【監督・脚本・出演　（精神科医・男）】

1953年8月19日生まれ、イタリア出身。
幼少期は映画と水球に情熱を注ぎ、高校を卒業すると自らの切手コレクションを売ったお金で8mmカメラを購入。73年に友人と映画を撮り始める。長編監督デビュー作は『青春のくずや～おはらい』(78)。
彼は、自ら監督したほぼ全作品にて脚本と出演も兼務しており、その独特の癖のあるユーモラスな作風で、世界中にファンを持つ。81年、『監督ミケーレの黄金の夢』でヴェネツィア国際映画祭審査員特別賞を、86年には『ジュリオの当惑』でベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞。94年には『親愛なる日記』でカンヌ国際映画祭監督賞を受賞し、01年の『息子の部屋』では同映画祭最高賞であるパルムドールを受賞するなど、気鋭の作家として常に注目されてきた。
その他の主な監督作品には、『僕のピアンカ』(84)、『赤いシュート』(89)、『ナンニ・モレッティのエイプリル』(98)などがあり、『ローマ法王の休日』は昨年の第64回カンヌ国際映画祭コンペティション部門に正式出品されている。
また2012年の第65回カンヌ国際映画祭では、初めての審査委員長を務める。



●ミシェル・ピッコリ　MICHEL PICCOLI
【ローマ法王（メルヴィル）】

1925年12月27日生まれ、フランス・パリ出身。
音楽一家に生まれたイタリア系フランス人。俳優としてのキャリアの最初の15年程は、舞台や映画で脇役を務めていた。63年、ブリジット・バルドーと共演したジャン＝リュック・ゴダール監督の『軽蔑』で頭角を現し、その後アート系作品から大作まで100本以上の作品で活躍。80年、マルコ・ベロッキオ監督の『Saito nel vuoto』でカンヌ国際映画祭最優秀男優賞を、82年には『Une étrange affaire』でベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞している他、11年のヨーロッパ映画賞では特別名誉賞も受賞している。
彼の主な代表作には、ジャン・ギャバン主演作『フレンチ・カンカン』(54)、ジャンヌ・モロー主演作『小間使の日記』(63)、ジャック・ドゥミ監督作『ロシュフォールの恋人たち』(66)、ルイス・ブニュエル監督作でカトリーヌ・ドヌーヴと共演した『昼顔』(67)、アルフレッド・ヒッチコック監督作『トパーズ』(69)、ルイ・マル監督作『アトランティック・シティ』(80)や『五月のミル』(89)、ジャン＝リュック・ゴダール監督作『パッション』(82)、レオス・カラックス監督作『汚れた血』(86)、ジェーン・バーキンと共演した『美しき諍い女』(91)、マルチェロ・マストロヤンニと共演した『百一夜』(94)、マノエル・デ・オリヴェイラ監督作『家路』(01)や『夜顔』(06)などがある。また、今後の作品には本年度カンヌ国際映画祭のコンペティション部門に出品されているレオス・カラックス監督の『Holy Motors』(12)、同じくコンペティション部門出品のアラン・レネ監督作『Vous n'avez encore rienvu』(12)、ラウル・ルイス監督の遺作となったジョン・マルコヴィッチとカトリーヌ・ドヌーヴ出演作『As Linhas de Torres』(12)などがある。

●イエルジー・スチュエル　JERZY STUHR
【ヴァチカン報道官】

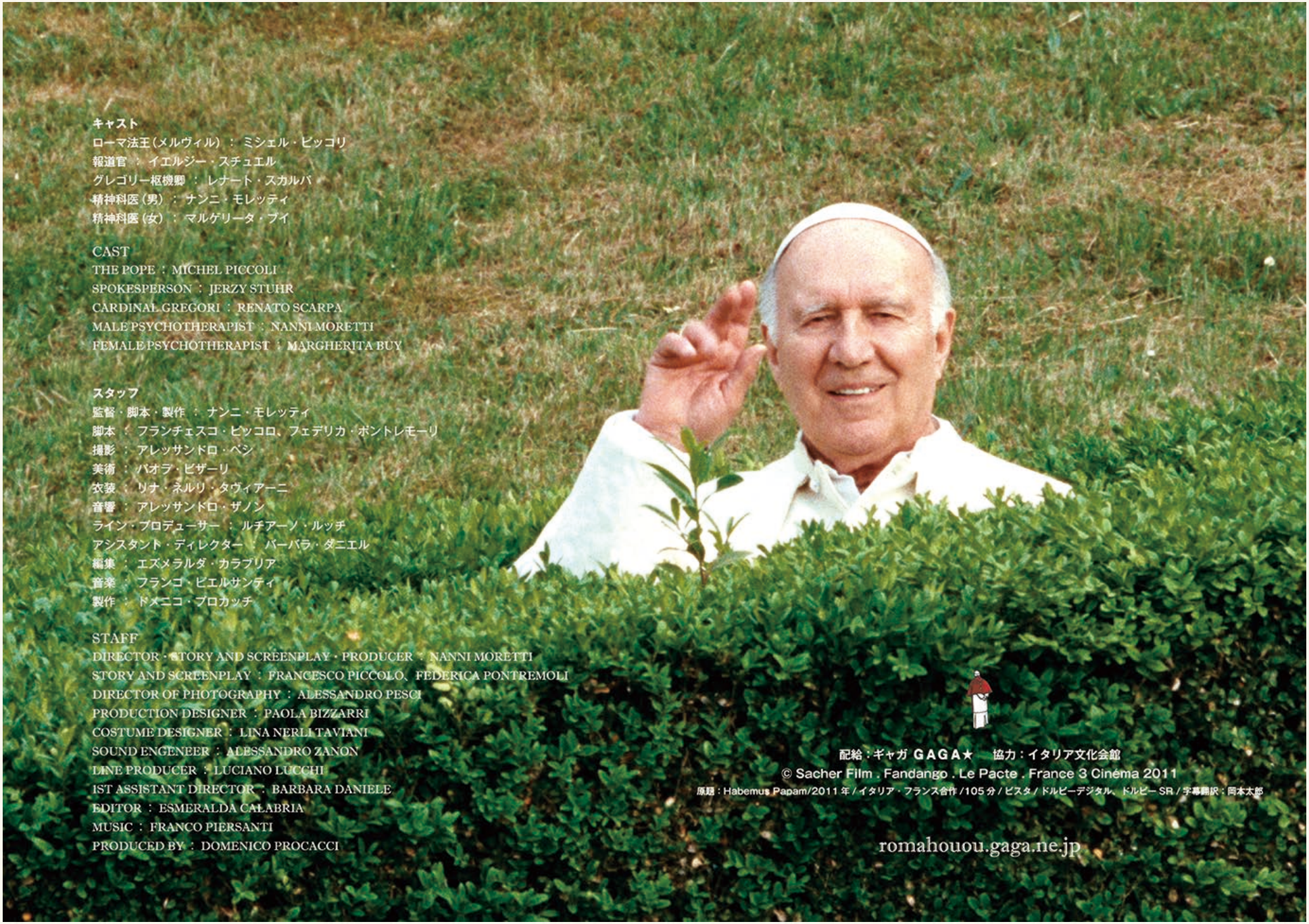
1947年4月18日生まれ、ポーランド出身。
ポーランドで最も有名で影響力のある映画・舞台俳優の一人であり、脚本や監督も務める。70年にポーランド文学の学位を取得後、クラクフの演劇芸術アカデミーで2年間演劇を学ぶ。70年代半ばにクシシュトフ・キエシロフスキー監督と出会ってからは、監督が96年に亡くなるまでずっと仕事を共にしている。
彼の代表作には、クシシュトフ・キエシロフスキー監督の『傷跡』(76)、『平穏』(76)、『アマチュア』(79)、『偶然』(82)、『トリコロール/白の愛』(94)などの他、クシシュトフ・ザヌーシ監督作『太陽の年』(84)、フェリクス・ファルク監督作『ヒーロー・オブ・ザ・イヤー』(86)、ラドスラフ・ビヴォヴァルスキー監督作『モンローに憧れて』(87)などがある。また、97年には『Love Stories』でヴェネツィア国際映画祭の国際批評家連盟賞とOCIC賞Honarable Mentionを受賞、99年には『Tydzien z zycia mezczyzny』で同映画祭OCICスペシャル賞を受賞している。

●レナート・スカルパ　RENATO SCARPA
【グレゴリー枢機卿】

1939年1月1日生まれ、イタリア・ミラノ出身。
主な出演作に、パオロ・タヴィアーニ監督作『獅座の星の下で』(69)、ニコラス・ローグ監督作『赤い影』(73)、ルイジ・コメンチーニ監督作『ミラノの恋人』(74)、ダリオ・アルジェント監督作『サスペリア』(77)、ピーター・デル・モンテ監督作、キャスリーン・ターナー主演の『ジュリア ジュリア』(87)、マイケル・ラドフォード監督作『イル・ポスティーノ』(94)、ノーマン・ジェイソン監督作、マリサ・トメイとロバート・ダウニー・Jr共演の『オンリー・ユー』(94)、ジャン・レノ主演作『ロザンナのために』(97)、アンソニー・ミンゲラ監督作『リプリー』(99)、アンジェリーナ・ジョリーとジョニー・デップの共演作『ツーリスト』(10)などがあり、ナンニ・モレッティ監督とは『息子の部屋』(01)でもタッグを組んでいる。

●マルゲリータ・ブイ　MARGHERITA BUY
【精神科医・女】

1962年1月15日生まれ、イタリア・ローマ出身。
主な出演作に、ナンニ・モレッティ製作の『イタリア不思議旅』(88)、セルジオ・ルビーニ監督・出演作『殺意のサン・マルコ駅』(90)、クリスチナ・コメンチーニ監督作『心のおもむくままに』(95)、ジョヴァンニ・ヴェロネージ監督作『イタリア的、恋愛マニュアル』(05)、ジュゼッペ・トルナトーレ監督作『題名のない子守唄』(06)、フランチェスカ・コメンチーニ監督作『まっさらな光のもとで』(09)などがある。また今後の作品には、ファウスト・ブリッツィ監督のコメディ『Com'è bello far l'amore』(12)、フェルザン・オズペテク監督作、エリオ・ジェルマーノ出演の『Magnifica presenza』(12)、ジュゼッペ・ピッチョーニ監督作、リッカルド・スカマルチョ出演の『Il rosso e il blu』(12)などがある。



キャスト
ローマ法王（メルヴィル）： ミシェル・ピッコリ
報道官 ： イエルジー・スチュエル
グレゴリー枢機卿 ： レナート・スカルパ
精神科医（男）： ナンニ・モレッティ
精神科医（女）： マルゲリータ・ブイ

CAST
THE POPE ： MICHEL PICCOLI
SPOKESPERSON ： JERZY STUHR
CARDINAL GREGORI ： RENATO SCARPA
MALE PSYCHOTHERAPIST ： NANNI MORETTI
FEMALE PSYCHOTHERAPIST ： MARGHERITA BUY

スタッフ
監督・脚本・製作 ： ナンニ・モレッティ
脚本 ： フランチェスコ・ピッコロ、フェデリカ・ポントレモーリ
撮影 ： アレッサンドロ・ペシ
美術 ： パオラ・ビザーリ
衣装 ： リナ・ネルリ・タヴィアーニ
音響 ： アレッサンドロ・ザノン
ライン・プロデューサー ： ルチアーノ・ルッチ
アシスタント・ディレクター ： バーバラ・ダニエル
編集 ： エズメラルダ・カラブリア
音楽 ： フランコ・ピエルサンティ
製作 ： ドメニコ・プロカッチ

STAFF
DIRECTOR・STORY AND SCREENPLAY・PRODUCER ： NANNI MORETTI
STORY AND SCREENPLAY ： FRANCESCO PICCOLO、FEDERICA PONTREMOLI
DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY ： ALESSANDRO PESCI
PRODUCTION DESIGNER ： PAOLA BIZZARRI
COSTUME DESIGNER ： LINA NERLI TAVIANI
SOUND ENGENEER ： ALESSANDRO ZANON
LINE PRODUCER ： LUCIANO LUCCHI
1ST ASSISTANT DIRECTOR ： BARBARA DANIELE
EDITOR ： ESMERALDA CALABRIA
MUSIC ： FRANCO PIERSANTI
PRODUCED BY ： DOMENICO PROCACCI

配給：ギャガ GAGA★　協力：イタリア文化会館
© Sacher Film . Fandango . Le Pacte . France 3 Cinéma 2011
原題：Habemus Papam/2011 年 / イタリア・フランス合作 /105 分 / ビスタ / ドルビーデジタル、ドルビー SR / 字幕翻訳：岡本太郎

romahouou.gaga.ne.jp

GAGA★